

# リレー読書日記

地震の被災者も豚を飼う人も  
必ず「繋がり」を求めている。  
そんな真実を教えてくれる本

二月下旬から三月上旬にかけて、殺人的スケジュールをこなした。さいたま地裁で公判がつづいている首都圏連続不審死事件の被告・木嶋佳苗の裁判の傍聴と、「三・一一」一周年の講演会が重なってしまったからである。  
皮切りは三月一日だった。この日は、東京地裁でカジノ賭博巨額不正融資事件で逮捕された大王製紙元会長の井川意高被告の初公判もあったので、さいたま地裁から東京地裁を、ハシゴとする離れ業をこなさなければならなかった。  
これはまだいい方で、三月九日から十二日にかけては、いま考えても冷や汗が出てくるような綱渡りの毎日だった。

三月九日はさいたま地裁の傍聴のあと、「三・一一」一周年の特番で「報道ステーション」のゲストに招かれ、翌十日は私が住む地元の流山で同じく「三・一一」一周年の講演、十一日は早朝札幌に飛び、やはり「三・一一」一周年の講演を終えて羽田にトンボ返り、そのまま「ニコニコ動画」に生出演した。  
「ニコニコ動画」では「津波と原発」というテーマで一時間半話した後、タクシード内で行き、さいたま市内のホテルに泊まった。翌日の朝早くから、首都圏連続不審死事件の論告求刑

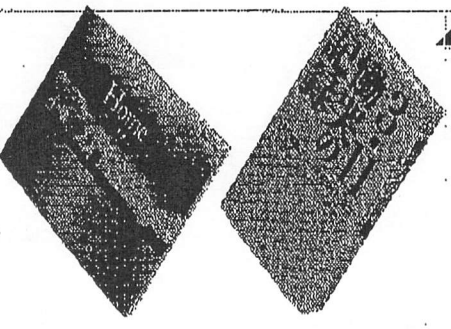


## 佐野真一

Sano Shiroshi

が予定されていたからである。木嶋佳苗被告に対する求刑は予想通り死刑だった。前置きが長くなった。なぜこんな個人的なスケジュールを細々と書いたかといえば、今回取りあげる本が、私のこの間の仕事と陰に陽に響きあっているように思

### 今回の3冊



つたからである。  
「3・11 震災の記録 71人が体感した大津波・原発・巨大地震」(金菱清/東北学院大学震災の記録プロジェクト編・新曜社、2940円)は、数多く刊行された「三・一一」一周年記念出版物の中で、私を知る限り飛びぬけて優れた記録となっている。  
五百ページを超す大部の本だが、あつという間に読破できるのは、この未曾有の体験がもつともらしい大文字、言葉ではなく、すべて、小文字、言葉で書かれていくからである。それが比類のない切実感となつて読者を圧倒する。  
重油の海に投げ出され生き残った女性ヘルパー、日用品が足りなくなりドラッグストアに盗みに入ったことを告白した学生、津波に流

されながら町全体が精霊流しのように見えたと綴った高年齢者、「久しぶり スッピン同志で 誰だっけ」といった笑うほかないメールで癒された主婦……。  
中でも、両親とはぐれ自分の無事を知らせるため、家の「玄関の下の泥に棒で「かな無実です」(無事と書きたかった……)とメモとして書いた」と記した阿部果菜という女子高生の記録は、悲しみの中に笑いをにじませて出色である。  
この本を読んでわかるのは、私たちが「三・一一」をいかに知らなかったかである。「三・一一」はリアルタイムで世界中が知るようになった。だが、私たちが衝撃的な映像でこの災害の重大さを知ることになったとき、大津波に巻き込まれた当の被災者たちはその映像と最も近い地点にいた



ことを忘れていた。  
この大災害の被災者は、地震や津波情報、そして行方不明者の安否情報を最も必要としながら、その情報から一番取り残されたところにいたのである。本書は、そのことを痛切に教えてくれる。  
感動で思わず涙が流れる  
白眉の場面  
「三・一一」の講演会で一番多く寄せられるのは、「私たちは「三・一一」の被害に遭われた皆さんに何をすればいいんでしょうか」という質問である。  
それに対して私は「ひとりひとりの「三・一一」体験を思い出すことです。そして、一年後の自分は、十年後の自分はそのときからどう変わったかを反芻することだと思えます」と答えることにしている。流山や札幌の講演会でも同じことを言った。  
本書は、私のそんな持論をいち早く実践しているように見える。